源氏二十巻抄

十二

857
118

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

857-118

源氏物語抄巻第十二

目録

わかな上

帝國圖書館

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

若菜上

巻の名ハ源氏四十ノ賀とて玉鬘(タマカツラ)のまいりて若菜(ワカナ)まいらせ給へる源氏卅九歳(サイ)の冬より四十一ハ春正月の事なり

きみかため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪ハ降つゝ

人に若菜給ふ事ノ例(レイ)初(ハシメ)之(ヲ)也

上下ハ巻のわけ也下巻より朱雀(シユシヤク)院へ女三宮つかれて

五十ノ賀ハすきつゝをされへき用意なりし紫(ムラサキノ)上物(ワツラヒ)給ふ

まつ小賀乃儀式(ギシキ)なしなり

同事する故ゆへに上下にわかつ

一日本紀　上下うけ給　れすりし事を書ゆへの

帝國圖書館

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

漢書（カンシヨ）ハ高祖（カウソ）紀（キ）上を第一にして下を第二とし又呂后（リヨコウ）
紀を第二にたてたる今の例に叶（カナ）へり
曲礼（キヨクライ）上下ハ紀者分之故に一巻の中に上下あり
檀弓（タンキウ）上下も後人注を付るとて簡策繁多（カンサクハンタ）なるか
ゆへに二巻にわけて上下とたてたるとや　花下略
あさましみゆきかくち　前のうち朱雀院の行幸（キヤウカウ）
なつかしなり
あれしさ　御不例（フレイ）かちなるよしや
朱雀院の事　朱雀院ハ法詞亟后（アレキサキ）のうせ給ふ事今みえ
ちと御隠遁（イントン）不孝（フカウ）ゆへと也としなり
むねの下　法悩（ナウ）かれこのひとすくむかつや

四とう　女一宮　藤壺（ハン）宮　女三宮　四宮
桐壺帝と　延喜乃御時承香殿（シヨキヤウサン）女御ハ三位源和子光孝天
皇の源氏也女御の御腹（ハラ）に斐子韶（ソ）子勤子内親王三人を
今女三の宮ハ是になすらへて候や三位源朝臣和子と
姓（シヤウ）を賜（タマハル）や　今前の御ある先帝（センテイ）御子薄雲（ウスクモ）女院式部卿宮
也といふ也（別腹又衣母）　朱雀院御代に后にもたゝれ
そくもしるし
法門も法師　法師よりて出家大后御（ゴセ）とや法師は
われりなりしや脱履（ダツレ）ハみれ給くしの巻にあり
十の宮　女三宮
これを　俗人のわかれてたまふ御事のなかハまれむつけなく

聞ちりなるを

にし山なる御てら　新国史云仁和四年八月十七日於
新造西山御願寺ニ修ス先帝周忌御斎会ヲ　天子の御いとこさ
れくるもめし此云々勅使ニ准ス御斎会ニ　天暦六年之考夫
宣仁和寺と号り給ふ事は擱叶也　花よ乗
承平法門ハ天暦六年三月ニ法出家ありて四月ニ仁和
寺に遷御ありし此物語ハ朱雀院を承平法門ニ准して
申侍也又この説を兼合たり
法ぞう御ん　遺誡　宇多法門を法出家ハ後朱雀院とや
御ハ承平四年ニ朱雀院ニ御処分ありてる王記ニ
みえたる

あて女法も　承香殿　擬黒乃妹
乃槐門ニ女法御まゐらしく来へ三ニ対面し給ふ
法うし給ふ　女法髪をそる事也
あの世すり　院乃法詞　東宮へ御りさあき給ふ
女御宮もむうつくしき事ともいひ合て御さかまきを文
されと云女法乃　女三乃母女法也
うしろみんと思ふを　女三を玉文の母女御にとのう
しろみんとまてをと　双紙
御いとつかう　女法史家ニまゐらせる
右院のうへ　朱雀院ハ法詞桐壺乃御遺言擁護ニ
大臣けと　宰相むきの法度もあれを也

をのかれしきれ　朧月夜　須广の事をとなり

春宮なとにも　源氏にもおもふるまや

あの道乃やミに　人の親乃心ハやみにあらねとも子を

思ふ道にまよひぬるかな

かくなしたる　御子乃ためかくなりきと人の思はん

事をあらんとなり

かく末乃世　冷泉院をも天暦乃御門になすらへなり

あの秋乃御宰　十月をも秋といへれは　象を貴するゆへ

とや　若秋とるて春小夏を麗きり　拾遺抄雑の上

に冷泉院の御宰戊十月とかけるなるを

年月のつもりつゝ　年よ取る也

古院乃御ゆいこんのことも　源へ大やけにつかふまつ

るへき事也　遺言なりける也

身のうへハをの　齢爵はともかくもそと源の身上を和

おきうゑくるを

廿にもわつかり　夕霧　中納言廿の歳年十二月也

年ハ〻ぬ　夕と雲ゐの中ゆるしくふかし儀なり

御子の御孫多く　女三をとも思ゆへなり

のゝりん乃　六条院

おほしめして　朱雀おほし召てるを

そのくしき　禁中に云るなやれ事也

されの世　前世乃のいきやうとなり

女（ニジヨウ）きゝちともの争論あり
ゆゝしきあたりそや　女一りとて源大ねろの成給へるを
諸多くの子れ　源（ソイ）癈光（クハウ）とするを
あやまちてもなをすけ　源氏ふたゝひ后にゐ給はむ事ハうとくあ
らんすや第一付されし事ともやあらんとや
内ニハ中宮　秋好
ぎやうゞしく　ほめたる詞也
中納言　女房の詞
御孫りひふかく　世ともに本臺（ホンタイ）の腹ニ今ニめ出れぬを十余
たゝのことそてや也
前斎院　槿（アサガホ）の斎院

おほけなきを　院乃御詞おほしゝ見えすへし　双
御遊くせ　[illegible]
わ遣めなれとも　兄弟（キヤウダイ）敵ともむつましけれ理よとなり
あさむかのまん　欺（ゴ）誑（ワウ）（アザムク）　たかへりされてむえ
おほし出らめるし　双
太中年　六条院の御さまを云へし　世ニ系圖（ケイヅ）人なり
さむ　あむ
こゝろむそとつみしも　付たる不慮（フリヨ）出来てもとゆへを
いしあれすら　天子の御子たまふ事もとなり
ちりを　笠をとふすへしとそ思召しより妹とするゆ
桃園乃花　詞はうりちりそうるをかくすせしとや

なんことなく　紫上

いみしきこと　紫上乃心まいや思ひ給ともめ三文ハ

よの人ハやうさんハをめされしとなり

ちうしあく　弁詞さ候くらひて又疑（カタキ）多りとも思案（シアン）し

より而白状（キ）也

これハあの世乃　源氏は心中に弁疏（ソ）は家来させてあり

むとをおかさぬと也　孟子対（ホンタイ）心もあるへし

けふを見まり　左中弁みえふもとる事

院乃はあまさ候　源のるり紫上　明石上　花散里なと

も源より重ね南とと也

きのくさん　めれと朱へ申上なり

いかなる趣ましと　朱は心いかにくと云事

ありかたき　源乃御心となり

さしあふ　平人ハ人女房ある中へ後あるむつかしう

おもふを云事

めさましき　紫よりそはつるてはとなり

いつれ也そのやうにてを　当世を縁（エン）の付事とかとするなり

かりそめにも　万（ヨロツ）の詞達（タツ）しける心の方より心得へき

極上となり

御心ときくし　我心とおもひつゝむゆるをあることなり

さやうの人　其外もやはりとゝと云事

にしき下人　召使ハ万く前もうしろさんれあるに

まことのよをたよりあるとするは
は子たちれ　皇女なとのやうにしれ男をつきあへく
しるとなり
なるも人の　不及中なれ八ひとりあまりし世のなら
ひとするは
うけ給りつゝしむる　夙興夜寝亡忝爾所生
ゆゑをてゆきをも　天子乃法女なとれ後見持をたもつし
うへとも也又親の家より何れ人乃娘れ形とくしゑ
すゑ猶に名のさいとをもき申同しことりや
あしくもよくも　二親ふとの定むる縁を善悪も宜乃わ
やまひうつらすとなり

わかきまて　主乃ちかひにまかせて八幸もあれあしひなれとも
何をもよりしくねとするは
むかしれ本のひかさ　孟子曰女子生而願為之有家父
母之心人皆有之不待父母之命媒妁之言鑽穴隙相窺踰
墻相從則父母國人賤之
みつからのむすめを教て　三界唯一心〻外無別法乃心也
何事も物をつくれき　女三宮の御事あつまりのれとめ乃
となかれむすめの緒ていとてふさんする事不可從外あらん
とれ何をもちなくなり
きこゆる白をさるうなる人きこえ大事とや
此よく〳〵末の御詞に花となと乃あしらなり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

ふりすてかたい　今は静（ニツ）におもひしまゝにも於山林へともいふ
是やまけしきを御煩（ワツラヒ）故山林の御心懸（カヽリ）とすや
もよほされてなん　句　こよなかりけるなんを句
かこくふあまた　紫上花散里明石上これらのある
とてめゆしろきんまくもなしとなる
人乃むねしや　女三宮むつかしとなり
乃やうの御　源の心を給也
おほしすゝ　源と御遊枝なり
又大納言　朱雀院乃別当（ヘツタウ）並系図（ケイヅ）
おほ并の御門めしけのしもゝ、とりんて親王家にあり
女三宮の御家司（ケイシ）をしるむねなり
若きかやうに　正三位源朝臣潔姫（キヨヒメ）嵯峨（サカ）天皇三女なり
天皇選（エランテ）聟（ムコヲ）降于人太政大臣正一位藤原朝臣良房（ヨシフサ）弱冠
之時天皇悦（ヨロコンテ）其風操超倫（タルコトニ）特勅嫁（ス）之
又なくかしつかん　二心なくおもきこえてきいかくとや
右衛門督　柏木（カシハギ）月被して給也
のよそほひあるや　御存分なし不叶となり
何様なる　世蟄居（チツアイ）をとりて人もやゝいれぬとなり
のれ水方して　四君柏月被乃婿（ムコ）也
左大将　むのうつへなり
按大納言　まへのうし　位を望（ノソミ）し大納言也
ゆえりのみ　○てよりつくさと人乃かなしさを儀ろし

増くと思ハすらうれ
なのめなるをこそ　女三たゞ人に宣許とするを
清らにせ　治定（チヂヤウ）して也
此文乃清しと　源まへくより及愛さるゝと祐御也
ひくるしき　源氏年への詞
あくまで又源　いくたく三乃御れとうとなり
けふ渡来を　花散不定なりしうすゝ
とりうれて　女三之
不定といひて　定まるも面白詞（キ）なりや
まつれ人　才へよ余ふる人に懸（ハカリ）給ふりとなり
ゆぐさまぐき　いきほひ也
すの文ハ清けゝり　女三の母ガ薄雲（ウスクモ）とハ姉妹（アネイモウト）也
いよいよ　美人（ビジン）のこと聞かしめをひるまと
年も暮ぬ　今ぞ来り年の暮りぬとあり
御もきのこと　李部王記ニ天暦六年十一月廿八日昌子内
親王初服裳（テフクスベシ）主上親（ミヅカラ）結（イユウ）腰給も贈物従リ御厨子所弁備ス之
以下略
いみじく　痛字
かゑとの　栢殿（カヘ）　朱雀院にある殿也
栢梁殿（ハクリヤウ）　皇后乃在所　西ハ對面（タイメン）所通路ひとつゝきなり
と殿あしハ后　長信秋殿云　又余戴於鳳凰金瑠
明年ニ冊ニ為ル貴妃ト半后服用云々　余してをよふの

給ふそ也かやうのりんさしの　きんたち　みさくりの
后あしゆひまん　兼明親王の后をその勝ゆ記小一条
左大臣乃例(レイ)　今ハ致仕
みさとらの　左右大臣
尊人所　尊人ホまく今の世中も調(トン)を通すこしふらり
てあり
そんじや　尊者　大饗(タイキヤウ)の時尊者(ソンジヤ)と云事ある也
く別(ヘツ)てとも給ひて可然　唐の徳宗(トクシヤウ)時以の三乃内一ある
をと尊者といへり
中宮よりは　后たちんをさき立上(ツカミアケ)の後式あるも摘(カクレ)乃者(ハコ)その也
うの首の　秋好入内乃時朱雀より装束くるを今其也し
宮の摧乃まけ　中宮の主け
斎宮乃后とされ　斎宮(ヒメミヤ)の后とちへ永りう院の后町さ給
乃御消息(セウソク)
さしなりうら　后れりう也くしにとをてうち給へる
拝さひ八え王とそ気又早下(ヒゲ)る事へ日のまし取りうお
む別(ヘツ)なり
何も猶　秋好斎拝(サイハイ)うしあやのうきものとある
いし後をしの事　中宮乃さし后きあ世三ととれ按となり
猶子も也ぶなのむりをすとてうえて后てむそうれ也
中宮の後子あやのちまされとうりや
むかしの家をさそさししときて中宮の蒿哉ハさしと

まて祝言（レウゲン）とあるハさたしかなる也

あしらへ事　院を賄（ヨウ）の表も法堪（カン）思（シ）あるへきなり

子ども　子孫思き一所さまや夫婦（フウフ）ハ契られし也と

おほしめすなり

山のはをより　李部王記天暦六年三月十四日朱雀太上天

皇落飾（ラクシヨク）入道　延暦寺座主（ザス）権大僧都（ソウヅ）下略

かりこのひて　女三宮ふひのまて静（シツカ）なる所にて御出家

もあるへきしとなり

法なかりき　院号ありし後の天子をは太上天皇とも申

のまゝり封戸（フコ）なとハひとしく人の戸を百姓（ヒヤクシヤウ）の民戸ある也

まうれしとくしつらぬ　西宮抄云太上天皇法行

脩飾人装束（シヤウゾク）不騎（キ）不乗（ノラ）

上皇乗車　檳榔（ビリヤウ）　朱雀院初也

出大内時乗金飾（キンシヤウシヨク）檳榔（ビリヤウ）のくるまハ此末乃乗日なれするろ

のちのよし

いとけなくてハなし　唐服（カラフク）を近代出来る也

うるはしきさまの　法出家なまきたるゝさく乃御心も世に御

用ゐなり

くれてうれしき　法服（キヤウ）也

と院ありしとなれ　源氏詞

あのことのかい　法道世（ヒンセイ）乃要（ヨウ）也

おふとりてを　一天下の法門法人となり

なく法あかさく　源氏中

ちかのあすの　世の人の光とかくやかしせましうしき給ふ
かのみかともなけのゆくまし　拾遺集　心替也
又宮山香は古る事也
かゝれはすてさんしまでもうちとき
ところの心さし　御出家志也
すかりのへあゝぬ　女三の宮　朱の御氣色を源氏心も
ゆかしく見給へり
御心のうちにも　源心中
けにさる人より　源詞　然は後見なきをいのしとは
一こととして　一こととしては一事々と云心の
人としては（と）云時也　心特也

女みのゝたぐひ　天下をたもつひ給ふ君なれとも女三の宮は
御事とて延喜までもいかゝと給ふ也
ゆきとまへつかまつる　忠烈の御後見何事にも懇切に
わかのとるか
いやうにかりひょ給　朱の御詞
いかゝへのためし　忠仁公の事世をたもちさせ給ふ時
忠仁公選婿来附二人ニ　下略　清和天皇忠仁公の御子
給ひしなり
月日はゆくかことし　日月逝矣　歳不我与　論語
内親王一人　女宮も親王宣下あり
せんされて　是也

きこえあく　出家しとのみする
御のみむ　朱丸御在世ありつもて　そなたましけれとも源
氏物語之しつらしやせむ深さそ来る日かりゝすま
と仕侍らむめり
法あるしれ　饗食精進(シヤウジン)物也
うるはしかりけり　法ものゝかまやしやかなる躰也
せんかうのうつはもの　調鏡(テウキ)打華時主上の茶抽で紫檀(シタン)也
鍑盤(カナハン)六十本まて御数有　浅香(センカウ)のうけもん可准之
御ちかひ　法拝信(ハチハチ)御法施に作用之緒(ヲハラウリヤウキ)黙とひら人也
出家乃後乃黙(ウツキ)也宇多法門の出家し後正月三日為観行
幸のため延喜法門仁和寺へ行幸ありし時法皇鞋靴(シヤククワ)を撒(チツ)
さしまゐらせて如手(ニヤニユ)三般しう人の皇上中も法皇は茶(チヤ)
を給(クハス)　下略　靴皆(クワクツ)の下のみ手を横(ヨコ)にして拝(ハイ)するとぞ
御はいてと二度也　御をもつ下凡とぞむ先殿上人の御前業
用意方(サウカタ)申しねは論(カウロン)以後也
うちさかれて　双比　九牛一毛となり
別當の大納言　女三宮後見(ウシロミ)の人(ノム)
おほむかし　世上のとりつくろふいかゝとあるとも
朱雀院　世事あつかひてそこなひの色法ちんみらしなめ
中々ゆかし　引き入り不及
その頃は　朱雀院より御消息ありて秋乃ころ也
つまりし　云付とる云むめ

いらひす　いなやも思ゆし給はなり
すくゝ　健(スクヤカ)中もえ申しさすと也
御代さめあるよに　けるゝ所ゝよりハうそらしゝと也
けふりの法ためにや　女三宮乃うちゑりて紫と源との法
申ようしんふむくるしきわうんとなり
もうるは御ふさひ　源のすゑん心乃るす也　紫上はゆり
かの御やさんと忘のつれなくて表しゝ紫種
のゑそてハなやとうめられ　紫と女三乃とうぬたまふす
そとなり
母女御　紫乃ためれい也　表はすん句ひのうしとり也
すへて　執心と云心也　不利並免用　人中ゝ取人そ
さくなく努よ悪人乃中しうきくしけふ思
心はうけは心うりふ肝要(カンヨウ)となり
あくはのうち中も　むかしされ人は心中
こゝより　あくみ紛てぬ事ともを
我心ふもくゝるを　源の心ふ去てさのもん事ふまくりふし
又紫上はりさため中も叶(カナ)はし　姫宮法親なる中へあるを
うきりしあなり　源と紫との中しと式アつふ方よさし
中もれおしめさぬむや　咒詛(シユソ)のろふと云心也
大ゐの御事しうそ御く　玉と紫上は志ゆさうくなり
いち志ふく　されもよと也
れいしの双　紫は心中しもなくてをとするを

人わらへなるらん　幸（サイハイ）にむくひある事をいへり

年もかへりぬ　源四十才

さふらひへる　兵ア卿　猶若大納言なとなり

しれわたらひ　天下のわつらひとなり

正月廿三日　正月乃賀（カ）ハ多分用子日ヲ廿三日中の子日

なるへし　子日の祝をわかのやくと云也　古今よ

君かためはるの野に出て若菜つむわか衣手に雪はふりつゝ

乃ちなと例延長二年　法皇醍醐（ダイゴ）ノ御門の御賀宇多法皇

若菜を献（ケン）せられし也　四十より年のこはるとわかすふよ

きそし祝（イハフ）也　七種薺（ナヅナ）蘩（ハコヘ）芹（セリ）菁（ナ）御形（ゴカヤウ）須（ス）々代（ミロ）佛座（ノサ）　十二種

薊（アザミ）苣（チサ）蕨（ワラビ）蓬（ヨモギ）なとも加之

御しつらひ　又も支度のめしきなり

南乃おとゝの西の　六条院の内乃南の殿の西をしつらはれたり

いてゐを母屋（モヤ）也

う位さう　發代　寝殿（シンデン）なとうらおもて乃下まてきぬを

たゝみすり

いしふもを　儒家（ジユケ）よりハ　ゆまきといへり

御地しき　地鋪（チシキ）を唐筵（カラムシロ）の大文高麗（カウライ）なる付る也

誂鬢（レウビン）の地鋪と云を氈（セン）のたくひせ　脇息（ケウソク）事　延喜御記

立蒔絵（ツクヰ）ノ大床子三脚（キャク）ヲ上立沈香（チンカウ）ノ挟息一脚ヲ

らてん　螺鈿　青貝すりたる具也

夏冬の御さうそく　仁和元年太政大臣賀　夏冬衣裳（シヤウ）各一襲（カサネ）

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

絵具(クワグ)屏風春秋夏冬四季也　四十乃賀に悉(コトゴトク)四十数を用ゆ

はくするなり

くすりの箱　四十より老の初なれは養生(ヤウジヤウ)にと也　御はし

乃りゑさりなり

ゆするはた又　泔器(ユスルツキ)　又臺(タイ)のんたらい乃類也

めくきの箱(ハコ)をお乱箱(ミダリハコ)也

かさしのたい　造花(ツクリハナ)を挿(タテ)よそく老をかくす心也　挿頭(カザシ)乃花

おはしきの事とも　又つりひなしるを但(タヾシ)又句はるひ

賦する也

こゝろはゆかく　心を乃おもしろき風流(フウリウ)也

めんの気ま　外さまへは出なとかの人ふ玉へ　源氏對面(タイメン)也

はんりしれ双

いめふさを　源氏人のおもやともつひくゝすのきさまう

たなるゆ人ちゝを

おはしまさても　兩人ませみせ給へんさいのくと源を玉

の恥(ハヂ)給へり

かりわけのと　玉乃腹(ハラ)三四歳(サイ)なるへし　勿論(モチロン)給へとしみ

むつ異様(イミヤウ)なる色しかりわたる髪(カミ)不霊(フヱニ)と云々

若いはもちうあてつゝめとなり　河れ誤

こ給よはひ　源詞

来くれ　玉のつけもの御子を持(モチ)給ひしは源乃よはひ

もくおくとりや又は子源ふ見せ給をぬなり

すけしハ世に文字教訓（キャウクン）なしし元

人よりことに　玉鬘（タマカツラ）男子二人（ツ）を産されたるとなり

をはしそ　業范朝臣上東門院より六十乃賀をたまはれることのひ

給けるに法性寺入道前太政大臣　かそへ人なり

こゝそれらく山の岩乃松とや年ひけましし

ゆうへ　ゆうまてゝきゝと也

とのゝくしも　御さくりのあるし

かつら衆にとる　玉かつらつれてさ女人子をとえせいきりくまり

なくむ氏さや乃岩松とさ玉も源氏の孫子也

せめく　たれその心也　源氏の恥（ハチ）給ふむるや

さるはこり　幽玄（ユウゲン）く祝義（シウギ）斗也

小松原　源は老人乃齢（ヨハヒ）にひかれて源も年をつまん
となり

式部卿宮　紫上父　大北（キ）方（ハヽノハ）母北方（ヘ）也

御むすめの君　式部卿のためにも孫（マゴ）　大北方の君の兄（キャウ）

姪（メイ）也

ことのよそほひ　外記ニ云ク延長二年正月廿又日清殿中（外記番記ト云物アル也）務卿敦慶（アツヨシノ）親王以下同兼輔（カチスケノ）朝臣執（トル）捧物（サヽケモノ）以（テ）持（テ）菓樹（シュニケツノ）蘭之類（菓ス）或（ハ）芝頭養（アラカヒメ）之物盛（モル）ニ小松ニ亜挿（シク）栖枝ニ折（ヲリヒツ）積物等女持（テ）菓子ホ也入（テ）自（リ）日花門ニ列（レツ）立（リウス）庭中（テイチウ）ニ　一列親王以下参議以上一列五位各奏（ス）ニ捧名（ヲ）記（シ）内膳（カミ）ニ忠望（タヽモチ）卒（ヰテ）膳部（ヲ）入（ル）自（リ）月華門ニ受（テ）捧物（ヲ）出（ツ）自（リ）同門　銀捧　献捧（両様）　あまくれの物とて一義の

あつまの　采女（ウネメ）調（トノフ）ニ和ヲ衆（ノアツモノ）ヲ羹ヲ采女又以テ羹ヲ除ス羹ヲ得（フレ）

る蔵（ニル）ニ中椀（ワン）並ニ中盤（ハン）

れおんはう　御器

朱雀院の法くまで　法悩（ナウ）也

たつしき　平字

はふむなと　樂器（カツキ）惣（ソウ）名也

第一なり　和琴殺仕第一　秘蔵（ヒサウ）也

お楽門諧　掐いふかく　辮字

上手の法きと　わやの上手覚絶（カクキツキ）とのとなり

わとあらてとも　むかしのうたくちかとゝる手少きもの中

く安（ヤスキ）となり

ものしきさ　無浄（ニズ）　和琴（ワコン）ニ限（カギル）の

ゆうふりかて　いとうくこしてた弾そひくをもるもを

乃かりの音のくきたの弟むの

わらくりふ　和呼

はなおきの　上音　同調子（テウシ）なんとなし

あひきやう　和たろ音あり

ことんハ兵部卿　器　女又絃（ゲン）

ぎやうでん　宜陽殿　西文殿ニ納テ　納殺累代（ヲサメトノキヨクタイ）の法物主宜

陽殿ニ恒例（クハンレイ）の御物納（ヲサム）蔵人所ニ

古院　桐壺（キリツボ）御門

一品宮　藝后（アンキキサキ）法腹（ハラ）の宮

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』　請求記号 857-118

ガラス使用

たゝくの　披仕　はらへくく

きんハおまへ　源乃はまへ

さやうの呂乃律よ歌ふる也日本にハ律呂と次第す

る也　唐にハ呂律唱哥侍臣とめすなり

青柳　青柳をかた糸によりてをけや鶯のをけやぬふ

といふかさを梅花のかさ　催馬楽

青柳に鶯もおとろきぬへきとかけるなるへし

やさしことの　六条とのハ私乃礼儀なれハことゝと

ハ卑下なれや縁をも可然と也還迹すくれたる云義の

かうなる人たちあつせ　源詞　うそふきたる人なかりをもい

たつかに谷の松とや年をつかへし

時くを老やまさると　源を見給へるなり

世をうすみはてく　玉の身上定たる

わかれさらまし　寝殿

内にうつるを　又内とまうひ給へり

いへハ何をまうる　双

けいし　藤大納言

御車よせたる所に　内臣下乃礼ハ妻と遠はうつゝ

車をよする所院号乃後なれハ源氏卑下してめしはあてま

違いまいちかひしふるとを源院号なれハめし車よせを給

是不例と也めしきをあやまりきるなりや

むかしの大君　吾家乃曲乃詞王孫といへるなりとなり

は中れわりひともれすん　双池

たいのうへを　是より紫上はおとろへ玉ふ

それやのふ　女三宮

いとらうかはしかる　女三宮のわさをとりもち給ふ

ゆへ紫上をとかくうき心と源の心也

ひとみちに　一向にと云也法のさかなのまうきとなる

みくけに　さしもよろしきをなれと也

さもなかし　紫上は也

法そともなき　源乃心也紫上搦也源氏は装束（シヤウソク）をと紙也

まいまへ　法ある庭（ソコ）り脚（キヤクシン）心也

はとそてよ給ひのまり　なとてかく源心中

まあしかしきみて　是より紫上

すふもりこま　何も不入事也源乃心ひまそてあく

定めうけ給ふ残りをもよりをりこに理（コトハリ）と定れとさんよ

やとまるを道理（ダウリ）とおれとも承也

いふめひなけに　定給ちそ何となくおほめし紛（フンキ）也

めふち如く　紫上　是之義也　女乃心もよりとこせ

ちまそり　秋萩乃下葉まつ面てめにちかくよ承なる

人のむそそみる

いたちうよ　源白（クワウ）白云（キ）と也食をたゆるともむ薬（ヲキリ）

ハのまおまりきとはく見るまをのなうひすくぬ申し

れ薬になり

とてそなれ　源典侍むもあの比志川まら給ひし哥也
ひとゝけ給ひしありくてとなり
のこまでまゐ　手去　懐（ハクル）むや
かくあまたのれあまた　紫上詞
給ひにのすひて　各（カク）まします世中も源氏給ひし不叶よ
仕とつひ女三宮乃ゆるひ可縁や源の君へも目馴（メナレ）て
さひしう思召たるとなり
それとむかひ　わうきへむ此あるよしも給へる紫また
おさなむ不実（ルウセ）るむつひんと仰給や
うとし気鍾　幼輩（ヨウハイ）の人まうきとも
中務中将　源氏かさの女房ふる乃御留守（ルス）よりむかしさ

さきのうこはあり
いふ為し　双　為そ源の仕むをかくてまで次第より
紫のうつくひ給ふゆへと双注
うし御かへくまで　死苦なく八中くむ安の御為し
紫上は一男女三宮の事と思召らんと勇ろら訪（トフラヒ）給へり
かくをもののあへて　紫詞
我身まての　いつふると思ひのある時そ身の力をとさ
てへうられしき　源氏をたの何代までと思召おそりの
け放（ハナレ）ても同世ろしおそしますとむ案わりひなくなあ
しせなり
ぬくれの　不及らし哉

やみハあやなし　春乃夜のやみをあやなし梅の花いろ
こそみえね香やハかくるゝ　めのやたちあまるとめれ
との独吟なるべし
猶乃これる雪　子城陰處猶殘雪衙鼓聲前未有塵
樂天雪の詩にて暗誦也子城を小方城衙門よふ事なと
官府乃除しみやんの未明ニ不遇るちりをうけぬなり
人くも空寝をしてわさとまつをまちり
をちきこゆれ　紫上にをちてわさとまさせるむなや
我まんをちめとも所へ給ふ詞をとりあへぬよ
てましきこゆ
おとけて　源氏おそしかさぬとそせをて恨給ひぬむつ
かしひあめや
のきをたれ人と　紫上ゟ女三かたらふとおほし
めしくらへ給へり
よ給ひつゝかしへ　紫上女三年よりうつくしくなやめかし
そしの始末を思ひて紫のくけ給ふをねとあとうつとみて
此給ふ所なり
きそおりひし事そのし　紫上
女君　紫上
御筆おと　女三を執し給ひなるべし
中道をへたる源氏のよふ中乃道也　心みたれおくを
ひ乃かつてひ殿下不持給へるを　かつ給てをこうしそ

ふく淡雪ハ梅也女人ハ心あるをそり
やりて見せて　女三宮乃御かへりを待たまへり
紫上ハ思給ふゆへなり
なよらか也　源抄てなよらか雪さうもむの手の筆蹟のこと
ほむるなり
紅とまきくり　文を付給ひし花のたくひなるへし
紙こそめうすやう　古今　いつれも紙よりまさるへ梅花あさ
とやあくれ鶯乃鳴
寫す花そのくし給ふるの心なりよそへてなり
女三宮　紫上へ女三よりの御返事をそはれて時刻をうつ
さんためなり　花本上乃傍に梅を用也ちりはうりさた
ともかくもの方まれ花に心こそうつさしと也　梅の香を
桜の花ににほはせて柳の枝にさかせてしかのひなり
あはれもあはむに　霞花兼開ハ時梅咲と也梅咲ぬるを見
もくら思ふと也　紫上返答ありあちすさる源氏自筆
批判あり
あさやかに　無心ぬ返也
むまつ嫁まて　紫上ハうたおもくしまてゆる時分なまめきたる法
手跡てかくとなり
志のし　文御手跡とも女見せ給たく修く給なんと也
花ともに只今既めくし新へ紫上へ御心なれと見せ
給へ也

されはそ云　風にしたかふ草乃心菩薩から源をた
のみて女三渡さりしをゆるし給ふ也　抛のかれしを下にも
たを給ふ人をめはしの云なるへし
ゆるしの事の縁なり　女三年のほと改ま紫上此心先洩年
遁悪故也
こと人乃うへ人なりしハ源心女三をそなへしハ年縁悪也紫
へのくり給ちんをのさとなり
今みたて源の御擬装を昏見也
あの法ありきぬ　紫上まいしまゐをさそられこそ源此法心よ
しと給人と女三乃かとの女房あへり
よろつくしとくしゆまさくけるあるさ侍なり

御そうら　身もなくちりさきむ気
院乃ころく　菩薩行しかはら男くしるへと有るを
たいりうふ　大やうにとや大かたまそたるて給ひしころ
あるま人のをしへにありてとそきとて其しあをとらせ
ね故と世上の人乃事をとう人を
為の心なりとも　源氏時善悪を撰とひし能あるハとなり
きをそれ給く　ね事出かろるをりてとまとしるを
とりくにと哉　よ次にあまたを悪にあくを世の理とるを
よ前此思ひハ　よ前より女三を源なりひ給ふよりハと
とりするしん気紫上はをすくるそて見給ふつ相紫勝
あをさらしく可讃と法自讃の心なるへし

ゆゝしさまて　紫は何とも思召まうけぬ心也
月のうちに　二月中旬也
いたはりしを　女三を源氏の心まゝを御異見（イケン）あるましと也
院のさるしめを示さんと憚（ハカリ）給ふなと也
ねさすれ人の　御文詞
右川経給へまの　女三と紫と母かたのいとこなり
そむきにし世　院あの世を子ともをさせ給へる　世のほ
めみえぬ山路にいらんと思ふ人しるかゝる絆也
やゝとなれきて　子とおもふ道のやゝとなり
ひとかへて　朱雀の心となくはかなくて世に心を残し女三
紫あつくたのみし給ふを申へき也

そむく世の方　紫をさし置て山中へ入も御無用とや
おもひしれりんの志　悪后（アシキサキ）の御座所にまことゝや也
佛の御事　のりんの志世とほとらん與（ク）はあしらん給へり
世の御もさなや　源六七事
とれく　叶く
御あつかひとも見給ふ中も　又なとまく見給へり
中納言　ゆふきり中言也
若きまつしき　又右大臣のまへく聟（ムコ）にとりしもあるを
源氏同心中なり
あまれつれしき　朱雀の御身上
なれなそと　給撰　なれなそと人のそつひてきぬへし

ひ乃やうくいのしあさくん

論語

きよまきそへて　きようくもなしとや也

たちかへりもの名　古今　村るは左りしかもの名今いしかく

しゝなしみともしるしあしゝや　むし鳥を抱詞か

しとりふとしもしやを同しきりしとも　うらもふれ

ふ要ゝ桜に涌（ヨコ）るり習（ナラヒ）や

ものた　和泉守なまきたなり　和泉なるしれたの森乃葛

代氣もみ拔ふもうまて堪くとりゐん

家忠るま　堂へ　時しやとすこえひ也

東のゐん　二条院の東院

おりひあそびする　朧（オホロ）そてならんとおもはるゝめ三此始

万（ヨロツ）葉にも閑（ヒマ）あ人里

あし語車　ひとへの時も也今又両白（キ）書籍也座つれさる

車（クルマ）なりの色し

おりひめくらして　和泉守調法（テウホウ）也

されきりうと　朧はしちめくのろくし花と源思召也

みかうしは左里　嚢子（カウシ）さかろくあ番て人乃不通顔にし

て對面（タイメン）となり

むもみあそふ　鳴（ニヲ）て翠（ミレ）る出り色さ里　春は浪乃玉もに

あそふ鶯名は足のいてるま文事をするゝれ

年伴　鬼るまの事　死去實（レンジツ）れ初しめさぬむとめなり

年仲るり末摘（スヱツム）に注す
あまりもかくて　障子（シヤウジ）を引あけんとする心なり
年月を云　中に障子あれは深き関のこゝろにあふと
みるそきまあらはしたるを
なみのこと云　自他（ジタ）涙のこほるゝ心にかきて逢（アフ）ことは縁（エ）
にまとひあひをしきてや　古人のありときけと
お坂の世の事もくるめぬりのなみたかれ
花はうは　多分（タブン）源氏よりたれとの事　又好色（カウシヨク）の名なれたり
ま握るとむ気の心中
作しやの　心実（ジツ）あるまことしさめぬとなり
大やけわさくし　御門又右大臣懸（アヱ）后（キサキ）なと乃りさめのあ

ひ好きぬ中なりしともかき
色ハまれ　花色也摘遂（スヱツ）
あの花よ　勝（シヤウ）ほうそ色そなり
何花なともそも　源の形をみて勝とあんてもれとる
見ほのん空中納言也ほいや
此文作り画好も　勝月秋を女御なや又たる人巌なきた并す
宮おさほしてさしやなり
古文　恋后
此摘経乃とら見を　源乃海路此心中を中納言思ひ座
よりや
やうくそしめのつ　物目や

きけみしも云　源よ嵐への事をよう〻語るり
渕（フチ）りさをたゝへてなり　ここ渕广か文をかれ云ハ
たらぬ爲し人ふくらぬ世けしよ嵐へとも
花乃わかれ於て　源よむとのけしなり
身跡云けん云　渕也雅敏（アミ）のきしや身をなし理よ渕よる
を波乃のし浙をいやふましきにあるまのしさ事なれ
を波もかけしやや也源の身をなくへきとある跡理（コトハリ）た
於也云乃むかる爲し
いかで身のやのなる　源の力を顧（カヘリミ）也
関守　人しれぬわか通路乃関守ハよひ〱ことにうちも
寐なゝん

哀をしくみゆらん　双
西もかりなしんと　内侍鏡（カヾミ）にあひ給ふをも心得給へと
螢ハ兵部卿宮なれと文くし卅給をぬなり
又かりすへき　螢へ勝のるし經給ふ理の中かりねと蘭也
すれむをえもんためまいらし給へき
むかしと今よりかりへれきけ乃をしまれくるへし
宮をいけになきよしもられ　詞中
中宮なる　源ありためて好なるれを螢乃兄中宮子
らんとするを
引つくなきして　引ようを作池るとう云む気
何事も　源よやかくやゝ語給へき

わりなくめしう　女三の宮の心かつうはゆんかくるしめ
おもへきをとくさそはうひのおもくみ源氏安思あすするに
おさなはしくおもしますといへんよう也後見をとやう
そのかり
桐壺の御方　明石中宮十三才也　御やもと源氏乃御
かたにはさかりしと内侍を御くるしきを云事なり
めけらしき　御懐妊あるころの
姫宮の　女三宮　事也
姫宮中も中乃戸　紫詞女三宮に御對面あらんとするに
あのしの君　女三より明石上乃方は年のした比と紫の申
さけかさ　桐壺の名

まいりしう　女三詞
人はいひる　源のことゝへ紛るゝ為て用ゐる不儀事とな
まは隠詞返答あまゝとなり
なにゝもうす　女三の御紫の兄弟なんと源を恥紛ひれ
うら覚むあらんをとそゆるし給へ
我よりのこれ人やをはしつる　呼む紫上も宮乃御子なり
されとうしろみなとたのしくかりし城ひとや
若うるま才一の君もそれ又久しき源うしなまたさなり
まなゝる歌合乃心ありて源の手をたてはりぬり
うらねとおほしめまあくぬり
御うハ母乃方を　古今序艶奢る吟詠ト云ゝ　古今聊

とおゆもをれつゝしむまねかゝるかくれく撫とや
又女御の君　女三と桐壺となり
猶たくひなくよう　紫上と源の見給ひての心去年
より今年ハ面白記（キ）也
てなく　上手ともみえて院との見る事となり
男にちかく方　紫乃手習（テナラヒ）子あそひしよう方の
源の心れかをれと合（アハセ）させし也　高家山旅ニス客雨ニ
養浮榜にもありさし夏山なるへし　白露をうつし
あきとより名高れち葉の山れ文付み達も　河
氷島れ方　源の心ハ如（ニ）ク名猶不変（フヘン）なく撫をとる
書きことられもむる紫れ法心中何とやらんうくゝ

あきと秋中も源を不器とや　氷魚をも高雅とよまんため也
よくみゆまて　紫上下乃心くるしくみゆるをもけち行
へきとあるうらしく思召也　源乃御心
とふひを　女三又紫をも対面（タイメン）より源の御諌ありれハ勝へ
一　御出となり
東宮の御ころそ　明石姫君（ノヒメキミ）　東宮乃女御なりる故の名乃
明石上より紫を真実（シンジツ）乃ねやとれかし也をなり
むりし乃　女三と紫とゆりうをもかうさて御人を
ねすしかうし哉　兄弟（キャウダイ）と云　紫上乃又と女三乃御母（ハ）と
兄弟也りさしとへいふをりけそして麻なや射をとゆへり
兄を兄弟とゆふまや

かさ志あなけれと也　うのぬかつくよむゐし　女三を
肉親之義を卑人と卑下（ヒゲ）也　ゆかのぬか海とてなすし
めさしなしと定りて河野とてもすつましのとつねくに
ゆて今生見参（ケンザン）もなりかたし後向後ハ如在をもされと論す
しのひ人となり
たのもしき　中納言詞
うむさ　朱雀
かくさん　白河むつまく宮を頼をする白
うらく宮も　女三へ文つり色の紙をやたなり
ゆとかくさしけなりつまし　朱雀より紫へ消息（セウソク）まうし〳〵と
ゆ人也
ひいなのすてかたき　紫上の今難捨（カタキステ）はそのくつかるなり
そのうへに成める　紫上はましますとて女三をむの色
紙へをなり
いかにまめし　源乃紫へ志（コヽロザシ）を一入みて紙へを又かれは付
ても口惜（クチヲシキ）人そいふとなり
かくにくけなく　女三と紫と中のあしからんれさ
まれといへり
神無月にたいのうへ
源氏の院ため紫上乃賀をいはひへ里
院のため御堂　見松風巻ニ　源氏の建立（コンリウ）法輪（ホウリン）ニ説法する義
薬師佛　寿命をいのれは御供へなり

ほとけ経らこちそ　供養（キス）　諸例　河海多之略之
ゆゝしき年よ　光字　廣大（クハウタイ）なる故也
かくへハきほひ　雲（タウ）乃のきはかやれ面白さにして見を
案語也り　東史中よりて法流（ニユキヤウ）ありて也
法としこ　年海年よ一月廿日忌と云むよや　法喜誕生（タンジヤウ）
日免　源氏正月もむりつゝよりの日廿三日なりと
法事を嵯峨（サカ）にて也二条院まて変をそり　行へ也
参季（ツキ）く六條院よて天見兄敬のわさくのね山れ
また二条院にてと也廿三日正月子日尹にて行ふる法
ゆへり二条院紫上わひと源ふ承也廿三日源瀞延生日
先年已あつてなり

たいしもそ　對屋（タイノヤ）也
院司　六条院（インシ）司
らそんのいし　倚子（イシ）をたてるる是を例（レイ）と注行ふ
主上望打と是外を不審　源天皇尊号（ソンカウ）也
法らめ法くゑ　承平七年十二月十七日陽成院法親王
源氏為太政大臣法賀　西方一の寺に法華經（ノ）八巻（ヲ）紺泥繪
金泥般若八合経を阿弥陀堂綾羅（アヤウライ）
内乃むそ　挑む象　かきはれうつくしきむすめ
うきしれたい　承和三年仁明天皇四十法賀御捧臺（カサシノタイ）
造沈香山（ツクルチンカウノヲ）以金為鶴（テヲツルヲ）令含（フクマシム）法捧以花（ヲ）
ありし花法うく　桐壺（キリツホ）乃うきより行ゆへ御かな上のきせ

たまふなり

是ハ四季の絵　内侍のかみの右大将殿ノ北方の四十

賀しける時ハ四季の絵のかきやうしろの屏風なり

のくきらをきる事　古今ニあり

せんすいたん　灘ノ庭ハたん也　山水なとをいふ

絵く我の事也

四十たくきて　四十賀ハよまり

万ざいらくわうじやう　延喜六年十一月十日ノ御賀ニ奏（ソウシ）

万歳楽（ミサイラク）ニ　次（ニツ）賀合楽（カウラク）次皇麞（ニワウジヤウ）

あすのらんしやう　かうらいの舞（カリコノ）乃うつる時乃楽也

権中納言　夕霧也　衛門督（ノカミ）柏（カシハ）

舞人乃落蹲（ラクソン）ハ両人かて入綾（イリアヤ）を舞納（ヘイ）へし

入あや　舞をはる時のてや　有取綾手者曰入綾（トルアヤテヲ　ニ　イフ　ト）　河

清かさ位　落蹲舞の時ハ源氏ハ中将役任を頭中将

まて舞給ひしなり

太政大臣なる　太政大臣たるし也

北乃政所　別家（ハツケ）ハこれ中宮の人成也　北ノ政所挑掖閣ニ

渡して後政所を号也　女房ノ居所ヲ堂上ト云心そ

人くひきゐて　将（ヒキイテ）　人く引つれてもりひの将軍（シヤウクン）

と云時乃心なり

子とせをの子て　せし海田ハくいけぬ矣済すや佐鶴

のいけぬ矣川まやまむ済くの　一位　侄済く乃くくそと

せとりにてそなたひかへおはく（二陌）河不引也
あの入道の家　廿七まくるまて家のとおくるをいふ
河ちの
このぬん　密（ミツく）にいふと思召ゆへにや母家をなくる事給
ひしにようてなりへしきし出てあらたれ中も衣もい
のしとなり
七大寺に御誦経　延長二年天子四十算布四千端十三大
寺々御誦（フジユ）経と河（ニユ）をかへおはく承平四年三月廿一日文河賀
七大寺東西延暦極楽寺各二河誦（ニユ）経（キヤウ）布（フ）施（セ）東（トウ）大（タイ）興（コウ）福（フク）大
安（アン）薬（ヤク）師（シ）延（エン）暦（リヤク）寺各（シク）又百端西（サイ）大（タイ）法（ホウ）隆（リウ）東西極（ゴク）楽（ラク）寺各四一
端諸寺内（フイ）裏息（ソク）災（サイ）延（エン）命（メイ）也　花　四十寺ちりうつ祭乃四十

寺の名不定大略七大寺なとあるへしされ
ほとくにみせて　中宮と　源氏御ともにてこそなり
おく家たく河息所　二所おほしまさは源氏の衣をあそ
き河孔雀をまもし也　又説二所おほしまさねは源氏を
二親のうへまてとおもおほしめし也
四十賀　仁明天皇天暦四十に成て四十二にて御崩（ホウキヨ）御　世上遊（メイヨウ）
停（サン）止ありて也
大やけさ海る　此事しめ紀に見えむきのむの
家乃おほしまする町　六条院の内ひたりの町秋好中宮
されくに　西ふまへつゝ乃右月のにとよむの又ありり
しれ大やけさまなる也

だいきやうは　むかしの嘗上の旅よりも祿なとのまさりけるなり

中宮はこゝにあるを

大饗（タイキヤウ）之事　中東二宮乃大饗とて毎年正月二日に

大内の外の玄輝門（ケンキモン）乃東の腋（エキ）よ東宮の饗あり同門の

西にて中宮の饗あり大臣公卿乃参集（サンシフ）也

まうちぎんだち　大臣息男達（ソクキミタチ）也　又位にはなきも

あいさし　壹銷（イチハヌ）せなり

名たのまひ　高名緑衣（カウメイロクニ）　韓將落飛形（カンシユウラツクハキヤウ）　我馬形（カキヤウ）　雲形（ウン）

鵠通天（クハクツウテン）　翠通天（エンリヨテン）　河

こきんそう　法母御息所（ミヤストコロ）也

むすほし　摺經とも　七大寺四十寺なとへ御誦經（ミシユキヤウ）物功德錢（クトクセニ）

と施入（セ）せられ　文延四年六条院は法花のためにて米穀

此獄なく賑給（レンキウ）のやうあるを　河説不用

當も乏人（ツ）に物を施（ホトコス）事也一とそり

あまりなし　ことの外なる事と云詞

中納言をおそつかさせ　源氏辞（ジ）し給ひしにより夕霧

うち給ひなり　行幸なとするにことなる夕霧をとられ

いふくふまて　譲の儀式（キシキ）あるなし

右大臣　雑也もなし　夕霧右大臣は成納人なり

我のこゝは　又一のことなるをあて（ヘツ）と也　霧字也先

まつりまて　夕霧の家をもちなれたるなり

ひんかしの町　花散里の事

あくれきやう　内裏(ダイリ)よりとこすこし北く法蔵も修理寮(スリレウ)

あくらう院なとより饗屯食(キヤウトンジキ)なと沙汰ありけれ別当人々宣(セン)

与出くるまうけ

たふをおほを　伝勅(テンチヨク)名字記(リ)　双乃注

たうとく　たくととや也　着渋(チヤクリツ)

うち乃御てめくせ　御てうてと云也　主上乃宸筆(シンヒツ)の也

の仮名まてもまなし　当今乃御手を御めてつきよき

うきたんる　うきてたまはるの　きさきの事なり

めくせなん御自らかれめやや也とよむなし

右馬四十五延長二年正月廿五日自(リ)宇多院執行業(ワカナウ)お御

裏院ゟ出御る四十之　入(ニウ)道日華門ニ御人大丈退出近衛騎之

次右馬寮(スムマツカサ)頭之　内竪(ナイシユ)右近(ウケタスツテ)ニ上宣ニ　右馬頭ホ

大臣立(ツ)ニ左仗ニ　馬頭承面頭之　此例(レイ)坂大のてひろり延

長ハ院より今是大内より六衛ふへわさとなり

まくようあん　左右近衛府(コンヱフ)　左右兵衛府左右衛門尉

河原乃左大臣略(レ)也

まんさいらく　河上(カワカミ)　志乃悪(シン)と龍(ソウ)するを云也

馬とかさもに楽あり

きこしきはかり　御怒とゆうの御ゆくさきのしさうかる也

ひわハれ井の　琵琶(ビハ)ハいかにもうるの兵也

年比うひ　源氏年来合點(トシコロカツテン)めされさるなしや耳本一とや

わあん　承平四年三月九日甚ニ仕中文清貞ニ　貞信(テイシン)公記

不及禄退出追従禄并ニ正和琴等ニ　かへりごゑ楽入ル宮二合ニ
此例なきなるへし　孫不引共此のことはもあるを王羲之
手ほんなとなるへし　それとくるやく退出ゆくへとひく
此筆なるをとひく手本やもと也
はるゝむの色とりて　むら色とうと云肉よりひの違たる
は馬とうきとる事也
ろくよう　昔
後くとも　大ねよりたまへまつり
内春宮一のみこ　一ノ院を朱雀院
斎宮の女　秋好
このたびの事　中宮そ今を御威光勝るゝと
夕霧を平人並也これはとものめ御覧とみえせさると也
さ後くゝるまきるも宰相までいそり
こなたのうへ　花散
三条の北方　雲井の雁
よるのまゝに　花散れは　あまりそのはした色は夕霧のうちと
まへ人紛へてきるふ乃は所をとて花ちる乃を抱くしれとや
としの色りぬ　源四十一
ちのつき　十四才　桐壺御産ちの事くるを
ゆくしぬへしと後　いけく安事をと云也紫上此事也
けれとし　紫上覚ニ御産なり
本との色て　御誕生此とはの宮との色けん人とするを

このあかし此汀町　小乃對
みそほり　名聞まんみしをといふ
かけ入りて　明石上の母
あの母君ハ　明石上をうひ給ふとなり
わの君　中務宮ひしゆく　君上宮まや
明石上をは源氏本なくさみ後月りしきしれさうまし也
世人　明石浦にて懸生字とし可云とや
わ母と源氏人か　双夫やう也するとなり
仙人の　日中（ニッチウ）
渉しと渡りまい　明石上
風なや　蝦（ヒキミ）悪風にもはいしまほんとるま

ゑうくは　華る也
よしめ紀をして　よしめ紀也てと云心也
あし　安楽寂野かしや
さりふはかり　かれ雅すらふきれと双也　六十又六とよむ
あからかみ　さまやのなる心也
むねうちつふまそ　明石上心苦しくてまいけらんしとなり
きつらんをや　呼子漏澄（ミヨルスミ）可読
浪経ときそめ　法此かりそてし當構経をやしさんと思
ひしとめ石上心中
れ引しをつ軒は　明石にて生給ひしとて波多城也谷を
つへ文みそあり孫となり

あまはりとまふ　ゝ揷と職せ姫君(ヒメギミ)にさらぬまとするも
めくとをすれ也　乳用とめへとも父を承へ称也
さむ乃なるゝ所　あやはとへ立出しまと人ハとゝむかしも
尼君(アマ)も本望と也
むかしの世中も　古る不用只老人ハ万事用捨(ヨウシヤ)すると也
さうさなし所　女御　心明也
世をはてゝ所　世をすてゝぬる身も明なるひとらめ也
玄なりし子をとふやうをと不道乃事をとがめり
義乃すゝ不　政しりそられぬをくちをしくも
中宮の不道す睦別(ムツキワカレ)とおほさぬ故以人よ
めくれ乃りとまそ　明石上れかさるれとなり
あちの方へ　外様へちかきさ也
うひあるうしと　尼君(アマギミ)乃ためよをうひあまともせり給
ふたまほしとするさ
たいのうへを　紫も　姫君(ヒメギミ)へ也
よろづのさはりうくし　御産(ゴサン)當日以下着(ス)白装束(キヤウゾク)九夜後(アラタメ)白装束(ヲ)後(ヨノツギ)也　女房ホ各(ヲノヲノ)着(キス)白(ニ)裳唐衣(キモカラキヌヲ)　云々　下略　産所に
さうろさと思
こりうるかる所　紫上ハ汝子なきゆゑ也
むかしはけふ　誕生(タンジヤウ)の君乃幼稚(ヨウチ)なくはなくせまほし也
をそき　明石上　今宮(ワカミヤ)乃おためうそなり
春宮のせんじなる　宣旨(センジ)はまく今も女房府内侍の事

けせうしたるなり
はむの色ゆゑ　延長四年六月一日皇后（クワウコ）産（ス）男児（ヲ）　村上
天皇　内侍奉仕浴湯（ユヲ）　大夫迎湯（ムカヘユ）　矣
うちうちのことを　明石の上乃揚弦（ヤウタイ）可弦と内侍のむ中也
入道れ女と内々ことりふんもうし中まゐらすと云也
六日とりふすり　まへ乃役色なり
七日の夜内より　延長元年七月廿日朱雀院御誕生（ゴタンジヤウ）七
日乃はうぶやしなひ内よりまうけ御前れ摺を榎木（エノキ）乃
小臺（タイ）六前に銀（シロカネ）の賜（シ）馬（ハ）頭（トウ）盤（ハン）やうの物どもゆゑるまうち
き年にあわせ　碁手（ゴテ）れ錢（セニ）又十貫銀錢拾貫又くあつ乙
条みのへくを女の装束（シヤウゾク）以下人ゝにまて是を給ふう

まことはうふきぬ一かさねむつき一重なとそ色そ添事
まかせ今内々より朱雀院れのうまをまさせ給ふ今参仕（サンジ）とうち
紛もあれと色人ゝへ給すゝまも禄（ロク）を賜時れ役者（ヤクシヤ）
なるべし
内々乃むつかしさを　内々のみゆきまみゐひさてん
やうをなし　外様むきことくしれとや　双方を
今までみえをぬの　器（シンキ）を大事なるなり
御くこの浴むときて　明石上にくうのふをまくきも
なくひき給を褒（ホメ）られ
浴む湯ゆるしなく　紫上とぬとのゆとみなり
らうくどを

文の御返しは　其の文法誕生（タンジヤウ）よりもるまし
あまがつ　をうこといふものなり
ぶく〳〵り　手あそびなり
此の文殊見たてまつらぬ尼君（アニキミ）ずりす文を乃世の不をみぬ
と也　雅誕生丸若宮（ワカミヤ）ニ但いのる
あること　作ることいふなや
すあしの相なり作るすれ　其の文丸法誕生乃由を思ひ
に合ひてり海見して入る隠者（インキヨノコヽロザシ）志也
い文をさうとも　今は八儀（ハチギ）をあらしとなり
こと有る事すうてを　つさとを京上させていて明石
上人へ文殊書てやるなり

あの寺法は　仏道文云
身をうゑるやうに　なすし世中まんゑなけれし何り
をとめ八世にまうれやうなるとなりひなしをを
目のやく海　出作もれる本もられ文字を目れ深へと也
まのれとをむきん行きん
過現因果經云普光之佛（フクハウブツ）　乃然灯之異名　出與于世ニ時善恵（ゼンヱ）
仙人あり　中略花を奉シ
彼善光如来讃曰善哉汝以此功德過阿僧祇劫當得作佛號曰
釈迦牟尼（シヤカムニ）ト　時善恵捧佛出家因云世尊我能得五ツ又奇（キ）
夢一ニハ我身卧大海ニ二ニハ我身枕須弥（スミ）ニ三ニハ若衆生入我身内（ルト）
四ニハ若手執日　又若手ニ執月　唯願ハ世尊為我解脱（ゲダツシ玉ヘ）　善恵

答云菩薩臥海者海在生死大海之中菩薩抜済衆生者出於生
死菩薩證寂生入方内者為法絶依処菩薩執日者智恵普照
菩薩執月者清涼衆生令離熱悩菩薩因縁更没将来威光之
相也　善見聞已不勝踊躍　大蔵経聲字函
今拘経にいへる所を善見仙人乃又経乃夢をとくるに
出来したりと云所なし但これむかしよりいへる事なるへし
須弥山とは梵語なり蘇迷盧山唐には妙高山と云四宝
をもつてかさまれる山なり大海と云海に入事八万由
旬地より出事八万由旬合十六万由旬乃山なるよしいひて
高さを名付也東西南北に四州ありて日月を山の半腹にて
めくらして昼夜をわかつといへり明石入道の夢をおもふに
上むまれんとする故此夢といへるにあきらく見えと合せて
みつからすみの山ハ山をさゝけたりといへる左右の山よりさし出
てまさてくるると云ハ女をそたてたるは明石上
をいふなるへし山の左右より日月のひかりさし出るを
月を中宮日ハ春宮にたとへ給ふ明石上乃女は中宮
に立て御子東宮を生給へき瑞也みつからハ山の下
にかくれて其光にあたらぬと云ハ明石入道ハ世を遁て
栄花をものそむ心なけれハその功徳をえんされハと定
まあらはれぬ世の人の山をもひろき海にうかへをく
とを東宮つ井に位にはつきての後四海をたなこころに
にきるへき也我身ちいさき舟に乗て西をさし

てらしも入道般若（ハンニヤ）の舟にさをさして生死の海をわたさ
せんと西方極楽（コクラク）の岸につけまつらんとなれは現当（ケンタウ）二世の
観法（クワンハウ）成就（シヤウシユウ）して月出吉瑞夢（キズイム）也善恵仙人の夢は次第日月を
見給へる事も錠光佛也 これあまたをあかせ給へる頗（スコフル）を
むね遠きりとゆへともをれくその欣求（ヲル）成就せ
る事也 世間の利益（リヤク）ことやとの事まてすへて是故可
思也又玄非三義を後夫乃兼は次第の海中に引あるを
夢つんけふと慈恩清（チンシテン）にあり又夢は月日を呑（ノム）とみ是を先
子をもうとも八つへ世夢八世の蓬萊（ハウレウ）乃れまたとゆへとも
私もおほく夢をもつてたとへて流故と化給へり故に
此次乃詞にも内教（ナイケウ）にむを為法中にも夢を信（シン）をへ文

るも多備と云々 花鳥余情説同也 用也
らうしをよまね 王法（ワウハウ）なしもらぬ身まても寄るとうかれを
さるもしにようのも新国（クニ）へ出そみてかしこしとなり
世紫中なるをしの国守（クンノカミ）に成よるとや掃木（ハキヽ）巻にあり
り、兄とも 石明上
ノ世のりやしたのしのに あらをもと詞浅くさむにかくへ
しむよりく白故可切
国のともと 中文をも雲母（ユリホ）といふかる夫子故法子る
かうる給へ我此人なり
あのりとりれおりひ 妻元御誕生（タンシヤウ）をするを
をれうね所乃うく 阿弥陀経

従是西方過十万億仏土有世界名曰極楽

西のかたをちかも　弥陀来迎也

水草きよき山　嵯峨の御代に玄賓を僧都になされし時官牒を樹にさしはさみて跡を隠して深山に入てそれ

ある　（牒状と云ハ上ヨリ被仰出を云也　牒てうもと云ハ書ノ心也）

と以國をあまさしめんことゝけさ給れうちハと遊す

まさるゝ　と以を外つハやすめ字

僧都号の色けれしるき

光いてん方　むかし世をたちかへ給ふへきなり

又云入道冥より明におもむく心ともいへり　呼

月日の来たるまゝ　母乃かくさへの文あるまゝ今日とかゝむと也　呼

ゆかしかるましき人乃うめをとりけり　此段不別也

明石入道も寄進入亦為乃ひろく又子孫のためにさ

むなしかりしへより人の深き発心中にもやゆるまし

き由を遺言し　悉達と釈尊も浄飯王乃金棺をかつき

給ふ目連又母乃ため于蘭盆をまうけ給しはぬ石れ上

の報身かりあらはれそもりのてう乃恩を報せんとし我

なるをゆるしんや似我身にて變化乃物となりひなせと

いひふれと河海ゆく四生の中の地獄とをいへる事とある

ちれまれと人界ハ劫初乃時より化生なりや八まさみし

られ今の變化と云て佛菩薩の神力或を定力よりて善

悪の業を感してのまそめの胎さらを現するもあり

変易生死と云ことをいふ也布袋和尚を弥勒の変化寒山十地を文殊普賢と云のことし明石入道変化の御といひあるものやうにきこえして可有ならんとてよもとうし定可有

かの外の岸は　善導大師乃讃に

誓到弥陀安養界還来穢国度人天也

十四日　ゑひらしふち

くすりふのうとも　薩埵王子飢虎ニ身ヲ施し給ふ　此義不審

私　此国に虎なけれはくすりとはいへし　力を捨て山に入にし

我なきあとも海乃ゆくへもしらんことをたのまれを

せし給ん　施字　ほとこしなり

あからうのかける所　浄土也

よしたる歳　深山に入りてし　絶人倫たる事と可心得

いはゝと　出家ある時乃のなしさを云しとなり

せかう　移入

ちよぶん　處分

やま處　文字處心の別に心也

佛乃御てし乃仏雖滅度常在霊山の心と弟子ホにさとすから

滅度乃時歎し事也尼公乃心に答るを　序品に

仏此夜滅度如薪盡火滅と云心なとる侍し

流るゝ　明石上

おもくしき　尼君と明石との對面とるを

物か語けなりて　おほろ當すゝぬるすなりてその心の

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

物語の中に此こゝろあしくさる詞多之
の給へる　尼君也
めとくむましき　よ尓人をあの翁と云つしやなり
ひのむすて我力を　へをれひの心得きくむたゆく給ふ
されしのこと思ひしと我今思ひ云給へる
尼君給とくまるを　明石上をさして尼君の詞
いふきえねりひを　源のさくしれと中す法尼君智ひ
侍りしとなり
我ゆきて　入道播州守護に成て下るを明石上我ねのふ
むまれのあとうをするを
うむまれし世は明石上と源を御契りの故又京へ上ると尼
君やし給へる
うひあう　中宮をまうけ給ふる事也
くさつゆさ　明石入道をとふむ　尼乃詞
世おへし時まふ　世にある時も入りたうひするむ指
なのつくしとするを
まうのきとら　尼君と入道と也　年月よらの契りの人を
うまとなりぬ身まを　明石早下也　此入道隠居なしても身
のりあいのしと也　表掃種を記給上あれむ中の
やこまんこそ　入道明石上ゆくやこまんとなり
まは川のこと　父のためとこそをおりひしと也
ゆるもれとくの　中宮は明石上付をまて王と見給ふと也

めくらひ給ふ　尼（ニキミ）君にそひ侍りてまします故なれハ尼君
たのむとなり
其の文ハ　尼君の明石上にかハりて給へり
いつれたてまつり　明石上詞
ゆゝしき身のこと　其文ハ文は上給ふまて尼君何事
もめしなれとも世の身ちかく也
いかにおほさま　源乃尼君そのおほ事すむやうに明石
上に代りて給へり
二條御くためしかきは　此ゆへ風中乃段とある
文ちかく　其文より明石乃女御へ参り給へとや
めつらしきこと侍る　其の文御誕生（タンジヤウ）乃事なり

春文の心をいへる
文集　其文乃御時后（キサキ）の身をそ御思案（ヤスムドコロ）とやある
古今集第一巻二条后を東宮の御息所と申ける同様子
乃あるなれはよくもとも也　呼
猶まうけ給ふに　手のゆゑぬ心也
たあらひめくく　堪忍（カンニン）あるまゝしくと明石上に申給へり
たいのうへおもそ　紫上ワの事へ御まゐと是なり
はまへこ　女院乃院藤
なかふき後に　此其の文乃院代よりありけとなり
今そのとちめを　明石上そのなく歳とも凛然（リンゼン）と女御
給ふへき男御子もあるへきも也

むつかしきあやしき 入道か手跡乃様(ヤウ)体(タイ)也
御願(クハン)ことあり 夕顔(ユフカホ)なとの御願(クハン)をとよむ也 可
猿(ヨル)承ニ充くくそんそんの
のをかりと見えたて 御代よなりんするりとあなと
あまをこよなく 明石上より御長命(チヤウメイ)にまあらんとなり
ゆつりきこゆる 御あかうひ母(バ)と人のよろしきもいかゝ
とて紫上り譲(ユツリ)ゆるとなり
ひとのうしを 紫上女御をあらしと云ひしる懇(コン)切(セツ)
なりと也
かくむつまきのあへき 明石上女御へものゝ給くみ
たまぬり

御ひさいのを 女御の御ひんのたゝみまゐらす様なり
明君乃御かたく 院を女三乃御かたにや
さりけりハ 明石上
おとろきぬ人なや 御目にとのあらたるかなや
御かたく 明石上
きぬを着 紫上の様なきあひそそく御ゐる人 宰相(ミヤ)女気
こなたにかはすそ あなたへ隔(カヤク)しをくにおきつへ
紫上わさとも御心理よるけとなり
おもひく候あた 明石上詞のふのひをうまさと云心の
思ひくさなくても年の経める北國のひのをせ秋の秋
此月 あとしひゝ人乃御ん法成を思ひあらむと嘆あり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

女よりそし　姫君成尤覚へしも不審はきんや男は子まて

ハと也　のこみつまかき位よ涅にもとを也なり

さのしかり

は中ともに明石上と紫上の中より御娘せんとるまし

るたてく源氏とは年ようふくうてきこひ給ふと也

まつきうやうに　明石上へいれたる御遣るすの源氏は御

諫し給ふと也明石上の所くまてみて思きくたまふ

ゆくれ事もなかるへし

ゆとさよけに　明石上の許

我その前

するの思らせ給める　源氏は思ひ離るとし許をとらす

含ての詞也　女三宮なとはむかへし

は思しさらもあらされて　入道の事をは明石上なとのみに

みくゝミ給へるていなり

はむみもあらせ　源氏中も見をならんとのむ也

まさしき　ききえぬ勧也

あくらん年は　明石入道の事　後の頌へ至

こよなからん八罪と滅せんこと勝たりし力となり

ゆうしきこく　利根なる人にも入道の指ひしを

つとむる人をなしとまさ自然にまさの因果や

らんとなり

ひし思たら　仏法数寄をせすしてと也

あらぬ世に　善處（センシヨ）へむハ無しかるとなり

今そめの　ゆゑ上詞

嶋乃孫　やよふ色のしるしをさあしねおく山乃梅つま乙哉

人をまちらすん

あさゑりのみ　源氏乃實（マコト）なる性（シヤウ）とかゝり

けやしくさしさ　明石ハ入道と源氏ハ出（タ）たり

ありき契　尼ひと入道とのる事なり

いとけやしきおんじし　梵字（ホンジ）を天竺（テンヂク）の文字なり

十二乃麻（マ）多（タ）帯文の對文れとお事あつて筆法乃悪（アシキ）を云り

けらんしよくむ題ま　源へ見せやしきるすまゝ

あきれをのある　お呵（ル）れくれしまゝ今文祈（リ）すると也

ゆうにハ文つてかなしきしいきんためなり

あの世つゝ　來世乃いやてなきうして官位（クハンイ）のかくなるまゝ

しきなり

ぜんかれれとく　　抄引て卅年かるゝと云也

忠文民部ハ將門（マサカト）征伐（セイハツ）乃大將軍（イシヤウクン）るまきるに勲賞（クンシヤウ）乃定まゝ

ける時清愼（セイシン）公賞（シヤウ）乃うくありしきときれこうしゆれ

とりしられたてまつりと中の右丞相（ユウセウシヤウ）刑（ケイ）乃疑（ウタガハ）しきときをは

たられハゆれ賞乃疑を行（コナ）へとくてあまとやしゆれ

られかもつ井ハ沙汰（サタ）ありまより翌朝（ヨクテウ）に民部ハ右兼お

まゝ家して安りて富貴（フツキ）乃券契（ケンケイ）をまけり家ふ彼つてもと

にきりて立るまきるの十指（ユビ）乃爪（ツメ）のうまてせ出て

血之紅と　なりたるやうにて　死するは悪霊と成也
里を取しや清原乙子孫を来なく成て小野宅を作家へ
傳りりと云こ見同紀氏家呼用之の為入道大臣乃来也
せがのゆつこに　花鳥源氏抱鏡作は猶乃事引歌ニ不及
ますみ何まくものし　親ことあるなし
ゆと時きなし　無流也　又時きなしと云所をうれほど
なれといふへきよりめく手すせ可心此気
この篇乃つゝみ　引哥不答して篇あそなり
ひのくし里　不為れむと今思為ス也
されましき悔りまひ　須六以来不思の契りて思為ル人り
あの急むまれ　ぬ為女御の事也

故須げなりけり　婚夫乃別参加を此事ハしり
うちのしとなり
ぬこさ海　左遷也
ひのうらみ　む中に佛法不沙汰
出達を又くして　源氏の親ともとして須へ参す事あり
故その親父ともうろ為とてと云むの女御へまいらせんと
あるむ也　其須ソイテ婚夫へ申須人至
あなたの流むまへと　女御を也れ生そせうと云須ハ是
て紫上へとろうふたりひ須ふなと源詞
めくまりされつつ　夫婦兄弟なまハむりの不及とるうと
よこさ海の人れなげの　他人乃思ひうけぬ情とせ

ましてあくふかと　明石上と紫上となれ給ふに付ても
とも又明石君の中ハ母とて明石上に於まて紫上へうらみ
くもきこえとてを物かたりもきこしをるまゝとも申しける
此句ハていはし色乃也可見
いかしへ乃世の　継母ハ身のうへをもはやくもさとあ
らぬのしたゝるを聞しあはれやうれしけれとも悪心成てし
とやうをへの悪しきありつゝしたるうれしさを世にいはさりし引
かへし継母をつらくのよしくれのかへしと也　呼心
らうくし事を　我利根にてして不別を通と也　あや只
思てもかの心をよし何とあらんやも見不忘捨ぬよ
あらんと朋友なとの中ハ子も可思ひかうまし
むかしは世のはゝかりぬ人　ありし世乃人くの中れ
こゝちもさりけり　あらすらぬとも疾ある人乃中ハた
のふ母しも何もかくしくとうなきよし　とあちきなめ給
とすれをもれつゝし不断よくもてなすしとると也　嘆
ろてもく　我を人も罪するまゝ不あくるをきまは　くるしの
らん罪をなくむかうとりしも也　同
おりひく海　くさとも
ゆへなし　故をは性由ハしさくさ海くくよ用捨ると也
此段二の巻ハ不定の心ふのよあり
ありかてきあけて　得失也
うつそて　あまてらうつくしきをもれとけするゝ讒譴に

かへり
ひさしきを　明と云　わすれさるものとしをうけた
れむなるをし　浩（コウ）渺（ヒヤク）え　浩ゑや　洪（コウ）水なりと
宇治　ゑの天にひろのをさる頼乃心の　ひさ寒ふも
あをうしとそおもけさるをいかくとなり
うさへの人を　紫上乃躰を淳尖（トシエツ）指くなりとれこゑ
そこふこゑ　明石上をさして淳ねく給へを
かさあをせ孫と　明石乃姫君（ヘイメウ）　紫上乃孝難（リヤウ）きされむけり
ひと云なり
めさましき揚よ　紫上乃光さ後しれりのをも明石上を
おりひ折きぬとなり
まなりぬ助れ　明石上助上のみのきみのうふ報と云
あく語なり
ゑそかくあれ　紫上此つんるなけるかきりてとや
乃こころ孫（太シン年）てかをうるや
うれ涛ためよ　明石上乃ためうりも女治を思（子言）ひ紫上
思ひ給へを
ゆつりきあそ　ある夕姫君（ヒメキミ）を見ながらとも不像ゆへ明石
上へゆつりおく宮の中もそをくしりうめとなり
られま又とりりちて　明石上紫をさしてきてそ母（ハ）の
かけめされま早下（ヒゲ）あるおや中ま云となり
めやもくられも　両方（リヤウハウ）むつきゆへとや

うれしき　源氏詞也

ねたし所なく　是ハよその人とのへきを

さりやうくこそ　我よく卑下しられたるを

たゝへ　女三宮殿なれとも紫上へ源やうを給ぬ

あれいへと　紫上ハ御志（コヽロザシ）乃忝（カタジケナキ）とおもふも理（コトハリ）也何事もえ異（ゲ）

しゑるかなのめにもをたくてなりぬと也女三宮も

うへのむさしほりり女三へもわくるを給ぬハけさ

志けるまくるりとあるを

われしすらまん　紫上も式部卿宮なれとも女三ハ今上

廉（カド）乃位（クラヰ）と也

志つとうこち　後云明石上後言（ウシロコト）をいひなくるを也

我すくせを　明石上　紫上と御対（タイ）のやうなるとなり

山住と　入道山隠（イン）とゐと

ゆくちのそれハ　耶（ヤ）輸（シュ）多（タ）羅（ラ）の福地の園と経ニ有てあ

らんかるをまろる乃我ハ　奥入ニ此事を不用と云々

家伝乃凡俗（ボンゾク）と云　伊蘇摂経ニハ塩尻（ニホシリ）の注塩尻乃る事後成

心不用と云　凡卑（ボンヒ）なるによりてかくこそちらすといひて

ありうんと云々往勝（ニュウシャウト）云々福分（フクブン）の種（タネ）ありと可心得

紅やしる母たしを仏乃妻羅（ツヒラ）とらハ母氏種まくとならて

ら我生したると云々為（ウイ）ハ都（ミヤコ）ニ必（ス）我生せんと云ハ

尼（ノク）の明石上を生しけると引来ためかしく福地園（フクチノソノ）と云

大殿乃志　夕霧女三宮乃御（テイ）を見給へり

うこち人　良人

柏思ひなけるに　夕む中よりのやのふむたけりなきぬ

人の中にのやのなる心をあるをしかれと独のも

はからさるよひのおくめふ法りぬとも言をなり

ふたうのなるとてむ乃句と可切

みしれもうけ　紫上の詳を今ねのひ思ふへ法ん王

野分の朝みしなり

まうの法小方　宮御遣（やり）

らうくしきに　如紫上をさかれとや

とらくふれりしき　源氏思人故夕の只今之折む中也

おかずあるに　きはうをおかれと外史はかり源乃うし

ろき程ふかく憑ん事あるへれんと也

院中もめさ扇しやと　朱雀院　柏む中

きこしけなくとも　女三宮と思ふ物まおもうらも紫上ろ

故にれ程やうまをせしとるまし

たくひなき法易にようはたうはしめ　源程ふき悪をなく

世もとなり

小侍従といふ　女三宮乃め氏とすと柏木れ史のとくハ

めいまし

かいありて　六条院法道む也

ことなしや　何事もあれりとなり

ことをいさせて　雀小弓也　並二別家

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

うしとらの町　花ちるさと也

ひんかしおもて　こともくしのしとも云也一くまある面白梅也

まかり　黄帝取伏羲元興寺に大なる槻木あり　是をうゑつる

しそ天気よきあそはしまる

ちんそんのひつし　寝殿の東むきに本よりの南のむかし

まつりや西本町しつまし後冷泉院之時分よりいてきたる

とうの弁　兵部卿なとはたつは　兄弟三人

そうしやう　年のめしさるとりくま

弁官も　儀式書とて世の鏡なりし八玄ましまし識なり

わつきたちふけりたるを　不審とや

うちのみかのひ　源氏の御弟よ見えてよしあそはされ

ぬるにあまり

きやうかやう　雉武　さえぬとふ鬪子鷄かしこの

ひくやうはいひしに對しての詞也

あつまの人のうち　ちうちうのかたのひなりなれともなり

もとき　ちゝ本歌

ほとうのみみこゑりくしさる　麻

それのし見みゆるを惣前也

みりしのる　寝殿の東むきに階あるなし

おとくも宮也　兵部卿宮

鷄を上りし不自敵實也若與鶏　後冷泉院よりとなり

かうかりのひさい　狗候日高冠距擢　振翅溯厚啓啄蛇

一下襲ほうこうして冠かふろく也　朗詠聯句白也不可有免

さる鞠の事也

あららかなれとも　表白裏蘇芳（ヘウシロクウラスハウ）呼

さしぬきのすそ　ゆくをさはらぬ人と見えたるなり

もてなる家々の法ゝ人のたよりとすや

すくれて　色もむなし但資雅以前あつまれ故と勝る

ましと云に不及事也　資雅ハ字多源氏流の末孫と

云蹴鞠乃家なる也　右雅以此子　為雅ハ彼家能院御時代

まめやかなり

あららかなれて　引言不及　根とは蹴鞠故老川へきと

以人難有也し

ぬさ袋　ぬさハ又文の綴又又後は糸にてあみたるとすきたれ

幣袋に入とや花ならは三月なれは春の手向と云

ひらしろく　引返くろくなむ

ほとりの所はあらつのけ　糸のうへにをく　籠中

此糸の柱のそれを云なりや此段聯句に云と呼ふもまた之

りしよりこそやまたは二ころにあつまりける糸の柱と可心得

すまひ草　次々にと云なり

ほうしの所は　双紙の書あやきぬのうきあまたるると云り

あまとかくる　あまとはしるなり

へてあらまし　あらまほしなる故不見

されはわり　尤なれや　あけぬハ本意なり

わざすれ　指示

たいの南おもて　東對の南の廂乃ことし紫上住給ふ方也

文を　兵部卿

わらうた　圓座（エンサ）

つはいもちい　椿葉（ツバキノハ）をへまとひくる餅（モチイ）也　うつほの物

種ゝ搗餅李柑子（スモヽカウジ）とらひて時分お遠ろ也し去年ゆの

かうりの　肴（サカナ）とみゆ

いそやこまこの　紫上

ゆるき猫をそみえれと　内ゝの用心さしゆるきとするを

うちとのようい　中庸云君子戒慎乎其所不睹恐懼乎其

所不聞又莫見乎隠莫顕乎微　故君子慎其獨　嗟

みその内外物見なとも用心ある理よとのそし也とあるを

宰相とも右衛門督西客

えらわきとを　紫お傳（サウテン）と思ふ指をよまと花様なり

こうそみえつれのしあつく秘ゝの

そのくし失まぜれるりきらぬ家風をとするを

家れ成ゝ人なとを　鞠のえ事さをおとしめたりやと也

みる人よおりひて　双對めされとる人と也　非器也

文乃御子　女三也

中れ御おかたの　紫と源との中也

おまく句を切てはまてもる也し

たいくし紀退（タイグ）りけての成ゝあるへきと云也

ことゝハさま　鶯ハおなし木ニて鳴て心やすくすミ
おかしくえんなりとも
あなかまほしく柏木ちかくまゐる人ニて女三おはします
りのまとし
いかなれハ云　源氏女三ノ宮によりまり給ぬと嫁るを
鶯ハ源にたとへて　桜ハ女三ニたとふる也　鶯ある花にやすら
ぬりのとこならさりける
あらきかの　詞の花ありのわかされハ女三ニ心うつ
すとなり
み山木にの云　三山木によりたるきてめくるをとりの
あけハつゝん事をとゝろおもへ　三山木ニ住給ふ

花をハ忘れしとなり　源をたてまつるに誘らる花ハ
女三　河ニ雄曼天官ノ時義作図ツルキ山と云所ニ
相見し人婦子ヲ負テ行ニ鶯ニとられてはこくとよれ死
よそり故ニはこくと云名あり
ひるおもむき　一向ニそれむくる人ハ源の外心あるしとも也
うんの点ハ　柏木おもへれある心の中ニ
いかなるはるも　相思恩のまゝ事の許ハあらしとおもふ
これハいつくとおもへるを
いつく　苦痛也
なのさまとれ字まち　養生涼寒人来織
小侍従のもと　とせへと云心なり

みつきのゝ　院中にまとひ人を雅ニ名ニしてさ春野の
花なり也　五の色のまさやかなる両親とみのさかり
乃三のくえり

みれとし　柏为上をさすて
あやなくけふは　みとをあしすみ毛をぬ人乃色しかれ
はやなくきふやすりめかしさん　又これきもをすり
よ成うみそ云　柏　仕けるともなり
ろといれ　柏乃鞠の時を簾中とみし事と不忘して
兄弟へ給まる　源乃女三宮へさしくる心をみて柏本よ
成けるしむくるしをみるとやし行となり
うつりし乃むれりし　小侍従の心よへふ気絶くり

源乃わきしきすすとめし也
みもをぬ　ともあしすの方れむれ
のしうきあし　源へ大将乃物をる行ひてそとなり
むかしうそとかれかりぬる　双也
たゝれかく　柏に小侍従の返事書り
一日つれなしのかゝとなむ　柏れ思ひと鞠の時思ひ给し
と簾中みゆひしと不忘してめさ海志を小侍従むよ
せたしく思ひ給ひしの心をほうにむよゆるさず
あるし我みすもあらぬやいの不也とゝめてなり
絶かれたつれなしかゝとつくれとも使よかく此每の
かひしさ　詞はりし

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

857
118

今はゝ小方　仙洞也　不及引歌ニ　うゐくしきあらん
詞にてきこえ程あしかれとさんね

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用